

# 男性・女性翻訳者が女の言葉を訳すとき

古川 弘子

## 1. はじめに

文学テキストでは、女性登場人物のせりふで女ことばが過剰に使われることで「女らしさ」が強調されており、この傾向は言文一致運動が起こった明治時代から続いてきたと言われている（Inoue, 2003, 2004; Levy, 2006; 中村, 2007a, 2007b）。翻訳テキストでも同様の傾向がみられるが（Fukuchi Meldrum, 2009; Furukawa 2012; 中村 2012; 古川 2013）、これは日本社会がみなす「理想的な女らしさ」に影響を受けているからであると考えられる。翻訳テキストをイデオロギー的な意味合いを持つ変換であると考えるとき、翻訳者の性別が翻訳テキストの女性登場人物の言葉づかいにどう影響を及ぼすのかについて考察することは非常に重要である。

そこで本講義では、男性と女性の両方の翻訳者によって訳された文学作品の文末詞使用を、定量的研究手法で分析した。その上で、なぜ男性翻訳者の方が女性登場人物の話し方を女らしく訳してしまうのか、その理由について考察した。

## 2. 翻訳者の性別が翻訳テキストに与える影響

今回の分析で取り上げた文学作品の日本語訳は以下の8冊である。ここで古典作品の日本語訳を扱った理由は、同じ作品に複数の翻訳テキストが存在し、翻訳者の性差も男性・女性の両方がいるため、翻訳者の性別と翻

訳テキストでの言葉づかいとの関連性を分析していくのに適していたからである。また、下記以外にも日本語訳は存在するが、日本語の変遷を考慮して1990年代以降の翻訳のみを対象とした。

1. 鴻巣友季子訳『嵐が丘』（2003, 以下『嵐が丘1』と呼ぶ）
2. 河島弘美訳『嵐が丘（上・下）』（2004, 以下『嵐が丘2』）
3. 小野寺健訳『嵐が丘（上・下）』（2010, 以下『嵐が丘3』）
4. 小尾美佐訳『ジェーン・エア（上・下）』（2006, 以下『ジェーン』）
5. ハーディング祥子訳『エマ』（1997, 以下『エマ1』）
6. 工藤政司訳『エマ（上・下）』（2000, 以下『エマ2』）
7. 中野康司訳『エマ（上・下）』（2005, 以下『エマ3』）
8. 中野康司訳『高慢と偏見（上・下）』（2003, 以下『プライド』）

*Wuthering Heights* (Emily Brontë, 1847) は、ヨークシャーの強風が吹き荒れる「嵐が丘」に住むアンショ一家の一人娘キャサリンと、孤児であるヒースクリフとの愛憎物語である。ここでは、2004年から2010年までの間に男女の翻訳者によって訳され、出版された3つのテキスト—鴻巣友季子訳（2003, 『嵐が丘1』）、河島弘美訳（2004, 『嵐が丘2』）、小野寺健訳（2010, 『嵐が丘3』）—を分析対象とした。

*Jane Eyre* (Charlotte Brontë, 1847) は、幼少期に両親を亡くした主人公のジェーン・エアが引き取られた叔母にいじめられて寄宿舎に入れられるが、自立の道を切り開き、家庭教師として赴いた先の領主と恋に落ちる話だ。ここでは、小尾美佐訳（2006, 『ジェーン』）を分析した。

*Pride and Prejudice* (Jane Austen, 1813) は、主人公エリザベス・ベネットと背が高くハンサムでお金持ちのミスター・ダーシーとの結婚がテーマ

の恋愛小説だ。現在出版されている日本語訳は3種類あり、ほとんどの登場人物が女性で想定される中心読者も女性であるにもかかわらず、翻訳者は全員男性である—富田彬訳(1950)、中野好夫訳(1963)、中野康司訳(2003)。今回は最新の中野康司訳(『プライド』)のみを対象とした。

*Emma* (Jane Austen, 1816) の南イングランドの大地主の娘である主人公エマが、恋のキューピット役として友人の結婚相手を探すために奔走するうちに自分の恋心に気がつく、という物語だ。この作品は1990年以降、男女の3人の翻訳者によって日本語に訳されている—ハーディング祥子訳(1997, 『エマ1』)、工藤政司訳(2000, 『エマ2』)、中野康司訳(2005, 『エマ3』)。

研究手法としては、女性登場人物と友人などの親しい間柄にある登場人物とのせりふを抽出し(対象文は『エマ1』が178, 『エマ2』が140, 『エマ3』が182)、その文末詞をオカモトとサトウの分類表(Okamoto and Sato, 1992, pp. 480-482; 巻末資料参照)にしたがって5段階—strongly feminine, moderately feminine, neutral, strongly masculine, moderately masculine—to分類した。ここで親しい間柄にある登場人物との会話のみを対象とした理由は、敬語を使わない状況に限定するためである。

結果は次ページの通りである。表で下線を引いたデータは、男性翻訳者による翻訳テキストで女性主人公がfeminine formsを使った割合である。これらを見てみると、概して男性翻訳者の方がfeminine formsの使用率が高く、したがって、会話文で登場人物の女らしさが強調されがちであることを示している。この結果は、男性翻訳者の方が女性翻訳者よりも女性登場人物の話し方にあるステレオタイプを持っており、翻訳するにはそのイメージの影響を受けやすいと言えるだろう。

男性・女性翻訳者が女の言葉を訳すとき

表 『嵐が丘 1』, 『嵐が丘 2』, 『嵐が丘 3』, 『ジェーン』, 『プライド』, 『エマ 1』, 『エマ 2』, 『エマ 3』の文末詞使用比較

	『嵐が丘 1』 (F 2003)	『嵐が丘 2』 (F 2004)	『嵐が丘 3』 (M 2010)	『ジェーン』 (F 2006)	『プライド』 (M 2003)	『エマ 1』 (F 1997)	『エマ 2』 (M 2000)	『エマ 3』 (M 2005)
<b>FF</b>	<b>56.63%</b>	<b>60.15%</b>	<b>68.71%</b>	<b>58.40%</b>	<b>75.52%</b>	<b>60.68%</b>	<b>79.28%</b>	<b>64.29%</b>
SFF	33.47%	44.09%	52.28%	30.66%	52.70%	46.07%	62.14%	43.41%
MFF	23.16%	16.06%	16.43%	27.74%	22.82%	14.61%	17.14%	20.88%
<b>MF</b>	<b>0.13%</b>	<b>0.30%</b>	<b>0.26%</b>	<b>0.00%</b>	<b>0.00%</b>	<b>0.00%</b>	<b>0.00%</b>	<b>0.00%</b>
SMF	0.13%	0.15%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
MMF	0.00%	0.15%	0.26%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
<b>NF</b>	<b>43.24%</b>	<b>39.56%</b>	<b>31.03%</b>	<b>41.61%</b>	<b>28.48%</b>	<b>39.33%</b>	<b>20.71%</b>	<b>35.71%</b>

- (1) 対象文は『嵐が丘 1』が 747, 『嵐が丘 2』が 685, 『嵐が丘 3』が 767, 『ジェーン』が 137, 『プライド』が 241, 『エマ 1』が 178, 『エマ 2』が 140, 『エマ 3』が 182。
- (2) 表記年は翻訳された年を指す。
- (3) 括弧のなかの M は男性翻訳者, F は女性翻訳者であることを示す。
- (4) 文末詞の略称は以下の通り, FF=feminine forms, SFF=strong feminine forms, MFF=moderately feminine forms, MF=masculine forms, SMF=strongly masculine forms, MMF=moderately masculine forms, NF=neutral forms.
- (5) すべて小数点第 3 位で四捨五入した。

遠藤 (1997, p. 171) によると, 第二次世界大戦後, 社会における女性の地位が向上するにつれて, 女ことばの使用が徐々に減ってきているという。日本女性が時々男ことばに分類されるような言葉を使ったり, 男性が女ことばとみなされる言葉を使ったりする事例も散見される。この点を考慮すれば, 『エマ』と『嵐が丘』の 3 つのテキストのなかで最初に翻訳された『エマ 1』と『嵐が丘 1』が最も女らしい言葉づかいをすると予測できるだろう。しかし, 結果は逆であった。

翻訳者の年齢について考えてみると, 古典作品は大学教授によって訳されることが多く, したがって年齢層も現代小説の翻訳者に比べると高めだ。例えば, 『エマ 2』, 『エマ 3』, 『プライド』は英文学の教授による翻訳であり, 工藤政司氏 (『エマ 2』) は 1931 年, 中野康司氏 (『エマ 3』と『プ

ライド』)は1946年生まれである。ということは、それぞれの翻訳者の年齢は、翻訳した時点で69歳、59歳(『エマ3』の場合)であったことになる。遠藤(1997, pp. 173-178)によれば、男性の年齢が高いほど女は女ことばを使うべきだと考える人が多くなる。この点を考慮すれば、上の表に示した女らしさを強調する翻訳は翻訳者の性別だけではなく年齢にも関係している可能性もある。

男性翻訳者が女性登場人物の会話文に *feminine forms* を多用する傾向があることに関して、詩人・伊藤比呂美が興味深い逸話を披露している(伊藤, 1990, p. 31)。これは、雑誌『翻訳の世界』での上野千鶴子との対談記事のなかで紹介されたものだが、男性翻訳家・青山南が同誌で Saki の *The Reticence of Lady Anne* を伊藤の文体を真似て翻訳した際に、伊藤の本来のスタイルよりもずいぶん女らしかったというのだ。

おもしろかったのは、以前『翻訳の世界』で青山南さんが、伊藤比呂美風というんで文章を書いたことがある(八五年一月号「スーパー翻訳パロディ」)。つまり、男が私の真似をして書いたの。そしたらね、私の本当の詩よりかなり女っぽくなってた。女語でかいてあるわけ。それでたしかに私風に見えるわけ。ところがホンモノの私は、女言葉をほとんど使ってないんだよね。たまに使うけどさ、それだけが増幅されて、読み手の頭の中にしみついている感じ。必要以上に私、女性的なテーマを使って女っぽい詩を書いていると思われているんじゃないのかしら(伊藤, 1990, p. 31)。

伊藤本人はほとんど女ことばを使わないのに、青山の「伊藤風」の訳文では女ことばが使われて「女っぽく」書かれていたという。この事実は、上で分析してきた男性翻訳者の女性登場人物の会話文の訳でみられた女らしさを強調する傾向を裏付けている。

### 3. 女ことばは残すべきか？

女ことばについての意識調査を見てみると、第二次世界大戦後からそれほど大きくは変わっていないことが分かる。『女のことばの文化史』（遠藤，1997，pp. 173-178）には、戦後、日本人が女と男のことばの違いをどのように受け入れてきたのか、女ことばに対する意識がどのように変わってきたか（変わらずにきたのか）が整理して掲載されている。例えば、1955年に大月書店により行われた調査では（郵便料金受取人払いの郵送方式で2,455人が回答した）、男女のことばの区別についての問いへの回答は以下のようになったという。

- |                  |     |
|------------------|-----|
| 1. もっと区別があった方がよい | 11% |
| 2. 現状でよい         | 56% |
| 3. 区別のない方がよい     | 31% |

この調査では、男女のことばの区別が現状か、もっとあった方がよいと考えた人は全体の67%に上った。一方で、31%が男女の言葉の区別をなくすべきだと考えた。

ほぼ30年後の1986年にNHKによって行われた「働く女性のことばの意識」（首都圏の働く女性363人が回答）では、「女性だけのことばを廃止すべきか、それとも残すべきか」との問いに対する回答の結果は以下のようなものであった。

- |                    |     |
|--------------------|-----|
| 1. 残すべき            | 16% |
| 2. どちらかというに残すべき    | 30% |
| 3. どちらかというに残す必要はない | 11% |
| 4. 残す必要はない         | 26% |

ここから、働く女性のほぼ半数の46%が女性だけのことばを積極的にせ

### 男性・女性翻訳者が女の言葉を訳すとき

よ消極的にせよ残すべきだと考えていることが変わる。一方で、女性だけのことばを残す必要はないと考える働く女性の割合は37%であった。1955年の調査では賛成派が67%だったのでやや割合は減ったものの、まだ約半数が女ことば肯定派であることは注目されてよい。

では、最初の調査から40年後の1995年に行われた調査結果はどうか。下は文化庁が16歳以上の3,000人を対象に行なった「国語に関する世論調査」の結果である。「男女のことばづかいに違いがなく なっていることについてどう考えるか」という問いに対する答えは以下のようなものであった。

- |                    |       |
|--------------------|-------|
| 1. 違いがない方がよい       | 9.8%  |
| 2. 自然の流れであり、やむをえない | 41.2% |
| 3. 違いがある方がよい       | 44.1% |

ここで、言葉の性差はなくした方がよい、または言葉の性差がなくなるのはやむをえないと考える人の合計が51%となり、初めて半数を上回った。しかし、言葉の性差解消に積極的に賛成する人はまだひと桁の9.8%である。この1995年の回答を男女別・年代別で見ると、興味深いことが分かる。上記の設問のなかで「違いがない方がよい」「自然の流れであり、やむをえない」を合わせた性差解消容認派は、割合の高い順から以下のようになっており、年齢が若いほど言葉の性差解消に積極的だということが分かる。

- |          |       |
|----------|-------|
| 1. 10代男性 | 73.5% |
| 2. 10代女性 | 73.0% |
| 3. 20代女性 | 67.2% |
| 4. 20代男性 | 65.1% |

一方「違いがある方がよい」の性差解消反対派は、以下のように分類され

た。

- |          |       |
|----------|-------|
| 1. 60代男性 | 52.1% |
| 2. 50代男性 | 51.3% |
| 3. 60代女性 | 48.7% |
| 4. 50代女性 | 46.0% |

ここから、年代が上がるほど男女のことばは違っているべきであると考え  
る人が増えることが明白だ。加えて、男性の方が女性よりも性差解消反対  
派が多いことも特筆すべきだろう。この女ことばを容認する男性の割合の  
高さは、上で示した女性文末詞の分析で示された「男性翻訳者の方が女性  
文末詞を使用する傾向がある」という結果と一致していると言えるだろう。

## 7. おわりに

本講義では、翻訳者の性別が女ことばの使い方にもどのような影響を与  
えるのかを、古典作品の複数の日本語訳を分析することによって考察してき  
た。*Emma*, *Pride and Prejudice*, *Wuthering Heights*, そして *Jane Eyre* の日本  
語訳計 8 点の翻訳テキストを定量分析した結果、男性翻訳者の方が女性翻  
訳者よりも feminine forms を使う確率が高いことが示された。これは、男  
性翻訳者が「女はこう話すべき」というステレオタイプに縛られやすいた  
めと考えられる。この結果は、伊藤比呂美に似せて訳した青山南による  
*The Reticence of Lady Anne* の日本語版に見られた現象と、1955 年、1986 年  
と 1995 年に行われた女ことばについての意識調査の結果と相関している。  
イーブンゾーハー (2012 [1978]: 163-164) は「翻訳テキストは翻訳される  
社会のシステムの一部であり、社会を表象する媒体である」と論じたが、  
今回の結果はその一例であると言えるだろう。



\* 本講演は、書籍 *Translating Women from Beyond the Anglo-American Eurozone* (eds. Luise von Flotow and Farzanah Farahzad. Ottawa: University of Ottawa Press) で発表される予定の論文の一部を基にしたものです。

### 【参 考 文 献】

- Even-Zohar, Itamar (2012 [1978]). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed), *The Translation Studies Reader*. (pp. 162-167). New York and London: Routledge. 162-167.
- Fukuchi Meldrum, Yukari (2009). Translationese-specific linguistics characteristics: A corpus-based study of contemporary Japanese translationese. 翻訳研究への招待 3: 105-131.
- Furukawa, Hiroko (2012). A Feminist Woman with a Given Female Language: A Contradictory Figure in the Japanese Translation of Margaret Atwood's *The Edible Woman*. *Babel*, Vol. 58, no. 2: 220-235.
- Inoue, Miyako (2003). Speech without a Speaking Body: 'Japanese Women's Language' in Translation. *Language & Communication*, 23: 315-330.
- (2004). Gender, Language, and Modernity: Toward an Effective History of 'Japanese Women's Language'. In S. Okamoto and J. Shibamoto Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People*. (pp. 57-75). New York: Oxford University Press.
- Levy, Indra (2006). *Sirens of the Western Shore: The Westernesque Femme Fatale, Translation, and Venacular Style in Modern Japanese Literature*. New York: Columbia University Press.
- Okamoto, Shigeko and Sato, Sie (1992). Less Feminine Speech among Young Japanese Females. In K. Hall et al. (Eds.), *Locating Power, Vol. 1*. (pp. 478-488). Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group.
- 伊藤比呂美 (1990) 「〈女〉というノン・ネイティブ」『翻訳の世界』9月号 15 [11]: 26-37.
- 遠藤織枝 (1997) 『女のことばの文化史』学陽書房
- 中村桃子 (2007a) 『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房
- (2007b) 『〈性〉と日本語—ことばがつくる女と男』NHK 出版
- (2012) 『女ことばと日本語』岩波書店
- 古川弘子 (2013) 「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳」『通訳翻訳研究』第13号: 1-23.

【分析テキスト】

- Austen, Jane (2003 [1813]). *Pride and Prejudice*. London : Penguin Books.  
——— (2005 [1816]). *Emma*. Cambridge and New York : Cambridge University Press.
- Brontë, Charlotte (2000 [1847]). *Jane Eyre*. Oxford : Oxford University Press.
- Brontë, Emily (2002 [1847]). *Wuthering Heights*. London : Penguin Classics.
- オースティン, ジェーン (1997) 『エマ』 (ハーディング祥子訳) 青山出版社
- オースティン, ジェーン (2005) 『エマ (上・下)』 (中野康司訳) 筑摩書店
- オースティン, ジェーン (2006 [2003]) 『高慢と偏見 (上・下)』 (中野康司訳) 筑摩書店
- オースティン, ジェーン (2007 [2000]) 『エマ (上・下)』 (工藤政司訳) 岩波書店
- ブロンテ, シャーロット (2006) 『ジェーン・エア (上・下)』 (小尾美佐訳) 光文社
- ブロンテ, エミリー (2003) 『嵐が丘』 (鴻巣友季子訳) 新潮社
- ブロンテ, エミリー (2004) 『嵐が丘 (上・下)』 (河島弘美訳) 岩波書店
- ブロンテ, エミリー (2010) 『嵐が丘 (上・下)』 (小野寺健訳) 光文社